

## 中国における簡牘研究の位相

池田温

木簡学会やその前身である木簡研究集会では、既に中国の簡牘について藤枝晃・大庭脩・永田永正・Michael LOEWE 等諸先生が、専門的立場から有益な解説・研究を講演されている。また近年は大庭脩『木簡』(学生社、一九七九)のような中国の簡牘を詳しく扱った便利な概説も出ていて、ひととおりのことは会員諸氏の先刻承知される所であろう。そこで木簡研究には門外漢の小生が一体なにを話したらよいか、そこぶる当惑せざるを得ない。やむをえずなるべく屋上屋を重ねないように、今まであまり触れられなかつた側面に眼を向け、中国において簡牘がどのような関心からいかに研究されているか、いわばその研究の背景をも含めて近年の学界状況を窺つてみよう。

### 一 中国における木簡・簡牘の用語

日本ではすでに木簡の語が術語として定着しているが、中国ではどうであろうか。最近刊行された代表的辞典『辭海』(上海辞書出版社)

社、一九七九、三冊本、一九八〇、縮印一冊本)の解説をみると、「木簡 战国至魏晋时代的書写材料。簡を參看。」とあり、簡にややまとまつた説明がある。字体はすべて日本の現行字体に直して引用すると、「簡 jiǎn (一)戰国至魏晉時代的書寫材料。是削製成的狹長竹片或木片、竹片称簡、木片称札或牘、統稱為簡、稍寬的長方形木片呼方、若干簡編綴在一起的叫策(冊)。均用毛筆墨書。漢的簡冊的長廣、如写詔書律令的長三尺(約六七·五厘米)、抄寫經書的長一尺四寸(約五六厘米)、民間寫書信的長一尺(約二三厘米)。在湖南長沙、湖北江陵、山東臨沂和西北地区如敦煌·居延·武威等地都有過重要發現。居延出土過編綴成冊的東漢文書。」(一八八七頁)(戰国から魏晉時代の書寫材料。けずつて作られた細長い竹片が木片であり、竹片を簡とよび、木片を札か牘とよび、簡と総称する。やや幅のある長方形の木片を方とよび、若干の簡を編綴してひとまとまりにしたものを策(冊)とよぶ。いずれも毛筆で墨書する。漢代の簡冊の長さは、詔書や律令を書くもの長さ二尺、經書をうつすもの長さ二尺四寸、民間で手紙を書くもの長さ一尺であった。湖南省長沙・湖北省

江陵・山東省臨沂と西北地方の敦煌・居延・武威などの地でいずれも重要な発見があった。居延では編綴されて冊になった東漢の文書が出た。」の如くであり、なお熟語に「簡牘 古代書写用的竹簡和木片、為未編成冊之稱。杜預《春秋經伝集解序》『大事書之于策、小事簡牘而已。』後亦称書信為“簡牘”。」（古代の書写に使われた竹簡と木片で、まだ冊に編成されぬものの称。用例、杜預《春秋經伝集解序》「大事はこれを策に書し、小事は簡牘のみ」後にはまた手紙を簡牘と称する。）が出ている。

なお関連する語として「牘 古代写字用的木片。參見 “簡”。（用例以下略）」（一四七六頁）、「札 (古時写字用的小木片。（用例以下略）」（二三四八頁）、「版 (古時書写用的小木片。（用例以下略）」（一四七五頁）などがある。

これらを通じて、決して学術的定義ではないが今日の中国における知識人の通念、ひいては一般の用語の使われかたを窺うことができる。又中学校の『中国歴史』教科書第一冊には竹木簡という挿図が含まれ、徐元邦・曹延尊両氏が共同で二千数百字の解説を「歴史教学」一九八〇一一期に掲げている。最初の部分を訳引すると、「わが国の古代の歴史上、紙の発明以前の書写材料で竹簡は大変重要な地位を占めている。人々は文字を特製の竹片・木片上に書き、これを簡とよんだ。一篇の文章を何枚もの簡に書きそしてこれらの簡をひとつながらに編綴したものを作（策）といい、あわせて簡冊」とある。

と称した。『尚書』多士篇に「惟れ殷の先人、典あり冊あり。」と言つてゐるから、商代にもう簡冊があつたらしい。一九七八年湖北省隨県で戦国時代の曾侯乙（約紀元前四三三年或いは稍後）の墓を発掘し竹簡二百余枚を得た。『漢書』芸文志には西漢武帝末年に魯の恭王が孔子の旧宅をこわし『尚書』『礼記』『論語』『孝経』等の簡書を得たことを記録する。その後又晋代の人や南齊時代の人が古塚を盗掘して竹簡書を得たことがあった。しかしこれらの実物はとつともに湮滅してしまって存在しない。解放以後考古事業の飛躍的展開について、竹木簡牘の出土は三十余回を下らず、全部で二万七・八千枚に達している。竹木簡牘の出土した地域は、北京・陝西・甘肅・山東・江蘇・河南・安徽・江西・広西等の省・市・区を包括する。発見された簡のうちで数量が比較的多く内容も比較的豊富なのは、雲夢睡虎地秦墓の秦の法律簡、湖南省長沙馬王堆三号西漢早期墓中の医書簡、湖北省江陵鳳凰山の西漢早期墓中の簡牘文書、山東省臨沂銀雀山の西漢武帝時代墓中の『孫子兵法』『孫臏兵法』等の兵書簡、居延の漢代烽燧遺跡から出土した屯戍文書、甘肃省武威磨咀子の漢墓中の『儀礼』簡と王杖簡、武威旱灘坡の東漢初期墓中の医藥簡牘、等々である。これらの発見は、我国の歴史を研究するに貴重な実物資料を提供したばかりでなく、同時に学問研究に新たな領域をきりひらき、漢簡学の研究はすでに中国の内外の考古学界の重要な課題となつてゐる。云々」という説明が、主に中学歴史教師を対象に

述べられている。

これらの用例を通観すると、日本の木簡の用語と特に扞格を生ずるものはない。簡だけでもほぼ木簡に対応し、竹木簡といえば竹簡・木簡の総称として安定した表現になる。簡牘は、『辞海』の説明のように策（冊）を除外する狭義と、簡冊を含める広義と両様に使用されている。すでに台北には簡牘学会や「簡牘学報」といった機関や出版物が存在しており、広義の簡牘が簡・牘・冊の総称として使用される傾向が今後も強まるであろう。

ここで竹簡の書写が竹の表面なのか或いは裏面なのかの問題に一言ふれておこう。というのは第一回木簡研究集会の折、岸俊男先生からこの質問が出たまま、はつきりした回答が皆の前で述べられずに来たから、この機会をかりてそれが一般に竹の裏面であるとお答えしたい。この点を明言したのは陳夢家氏の執筆になる『武威漢簡』で、「武威出土の竹簡は竹の裏（すなわちいわゆる策）の面に書写され、年代を経ても虫くいの害を受けていないが、出土後風化によりひびわれを生じわれ目はさざくれだっている。これは書写以前にきつと殺青の手続きを経たことを証する。一緒に出土した木簡は、少数の棺側におちいって湿氣をこうむり湾曲したもの以外は九割以上が平直で曲っていない。するとこれら木簡もあらかじめ乾燥させてから後で書写したものである。」（文物出版社、一九六四、五七頁）といふ。『説文解字』艸部では策と策がそれぞれ

と解説され、段玉裁の注は策を「その内質白きを謂うなり。又白きこと紙の如きものあり。「呉都賦」注にこれを竹孚俞という。」とある。竹の緑色の表皮が策で内側の白い方が策であり、殺青の処理をすませた後で白い内側の面に書写されたのである。

右の陳氏の記述は『武威漢簡』の叙論の三、「実物よりみた漢代簡冊制度」に含まれており、この節は一出土、二材料、三長度、四刮治、五編聯、六繕写、七容字、八題記、九削改、一〇收卷、一一錯簡、一二標号、一三文字、一四余論よりなり、管見の範囲では中國簡牘・冊書の形式、作製技法等に関する最もすぐれた導論とみられる。近刊の陳氏の遺著『漢簡綴述』（中華書局、一九八〇）に本節が特に収録されたのも、中国においてこの記述が重視されている証といえよう。

簡牘の形や大きさの指称についても未だ統一基準が作られるに至つておらず、『辞海』の説明に見るような漠然たる通念によつていい。細長いロ形のものは竹木を問わず策とよばれ、区別するばあい竹簡・木簡という。長方形の木板は牘・版・札・方などとよばれるがそれら相互の区別は必ずしも一定していない。竹では広幅のものは普通出来ないが、前漢景帝初年の湖北省江陵鳳凰山一〇号墓出土の大竹簡には三四行書かれた例がある。一本一本の簡に対し、編綴されたものが冊（策）でありこれも竹木ともに用いる。区別するに

策 竹膚也、从竹民声。

策 竹裏也、从竹本声。

は竹冊・木冊といえばよい。そしてこれら簡・牘・冊すべてを含む用語が広義の簡牘であり、略して単に簡と呼ばれることが多い。楚簡とか漢簡の簡がそれに当る。この程度心得ていれば中国の文献を利用するに支障はないであろう。

詔書律令の三尺、経書の二尺四寸というのもめぼしい例をあげたもので、もとより詔書律令は必ず三尺の簡に書くとか、三尺の簡は詔書律令だけに使われるといった厳密な限定があつた訳ではない。

戦国後期の楚の竹簡遣策には長さ五八〇六八厘米余の例が知られ、三尺の簡冊がこうした用途にも使われたことがわかる。湖北省雲夢睡

虎地秦墓出土の有名な秦律簡は長さ二七〇二八厘米で大体一尺二寸に当る。また河南省信陽長台関の戦国楚墓からは簡を作るに用いる銅刮刀・削・小鎌・鋸などが出土しており、同じ楚墓や鳳凰山一〇号漢墓からは簡に字を書く毛筆と筆を入れる筆筒が見付かっている。なお鳳凰山一六八号墓から発見された一箇の竹笥には、毛筆・墨・石硯・削刀と字の書いてない木牘が入っていた。

## 二 中国における簡牘研究のありかた

### —古文字研究との関連—

わが国の木簡が、奈良の平城宮址を対象とする考古学的発掘の中

で始めて大量に発見され、その研究の展開も宮都考古学の成長と密接不可分の関係にあるに比し、中国の簡牘は辺境の防衛施設と墳墓

から主として発掘され、その研究は独自の伝統をもつ古文字学と金石学の上に築かれてきた。古文字学は清朝考證学の中核をなす小学の重要な部門であり、今世紀初以来殷墟で大量に発見された最古の漢字資料甲骨文の研究を通じ、急速にその視野を拡げ古代学推進のかなめともいべき役割を帯びている。甲骨文につぐ古代文字資料である青銅器銘文や古石刻（春秋時代の玉の盟書や戦国秦漢の石刻・印璽・封泥・陶文等）を対象とする金石学は古文字学と分ちがたく結び付いており、今世紀の資料の著増をふまえてこれまで急成長をとげてきた。

中国簡牘学の開創者に羅振玉（一八六六—一九四〇）・王国維（一八七七—一九二七）両氏をあげるのは定論といえようが、この両者こそ伝統的古文字学・金石学と近代史学の転回点に位置する偉大な存在であった。その後の簡牘研究の推進者をあげるなら、馬衡（一八八一—一九五五）・賀昌群（一九〇五—？）・陳夢家（一九一一—一九六六）・勞榦（一九〇七）諸氏の名が浮かぶ。これら諸氏の中で、労榦氏は漢代史の専家、賀氏が東西交渉史・中古史に広い関心を有する他、馬・陳氏は古文字学・金石学に本領を有する学者である。

このような背景を念頭におく時、近年の中国における古文字学界の活発な活動は注目に値するものがある。一九七六年秋の政変以降、中国は急速に文革を収束し近代化に向けて学術体制の大転換を図り、百花齊放に向けて学界活動の組織化と充実を推進していく

## 中国における簡牘研究の位相

る。その中で七九年四月中国考古学会、八〇年正月中国歴史学会が正式に成立をみた。ところが遙かに規模は小さいとはいえ、中国古文字学術討論会の第一回大会はそれに先んじて七八年一一月二九日（一二月八日に長春の吉林大学で開催され、そこで中国古文字学会が誕生し、以後毎年一回全国大会を行なつてきた。この第一回大会の内容は「古文字研究」第一輯（中華書局、一九七九年八月）に全貌が伝えられている。丁度七九年には「木簡研究」第一号がデビューしたが、同じ年に「古文字研究」が出現したのは不思議な廻り合わせといえよう。この二冊を較べてみれば、両国の学術のおかれている状況の驚くべき差異がよく実感される。

「古文字研究」第一輯には、まず大会秘書グループによる吉林大學古文字学術討論会紀要があり、大会の経緯と内容が要約報告され、次に新華社の長春発ニュース記事「すみやかに古文字研究工作のたちおくれを改善せよ」を掲げている。主催校たる吉林大学古文字研究室の「古文字研究工作の現状と展望」より前にこの通信社のニュースをおいた所にも、関係者の危機感とその克服への強い意志を窺うことができる。何人かの古文字学者が、いかに古文字研究を発展させまた隊伍を養成するかといった問題について、記者に向つて語つたかれらの建議には、目前の主要問題として、左の諸項がみえる。

(一) 専門家集団の青黄不接（後継者不足）。現在中国で古文字研究に從

事している専門家は百人にたりず、若干の著名な專家は大多数高齢で体力が衰えている。中山大学教授容庚はすでに八四歳、吉林大学教授于省吾は八二歳、四川大学歴史系主任徐中舒は八一歳、その他何人の老教授たとえば商承祚も八十近くとなつていて、四〇歳以上の中年の專家でしつかりした研究基盤をもち仕事の能力に富み成果をあげている者の数は多くない。三〇歳前後の專家に至つては殆どいないに近い（原文は稀なること鳳毛麟角の如し）。他方、現在専門家の大部分は各地に分散して統一的指導に缺け、相互に連絡がなく研究工作でしばしば鉢合せ（重複の無駄）をしてしまう。

(二) 専門書・工具書（参考書）の欠乏と機械設備の時代遅れ。目下古文字研究に利用できる概説書と参考書はいずれも一九三〇年代に編纂出版されたものである。数年来われわれ自身ではまだ一冊もちゃんととした参考書を出しておらず、やや一般向けの古文字概論でさえ非常に少い。多くの大学や専門学校及び研究所では書物の不足、資料の欠乏が甚だ深刻である。北京大学は最高学府と称しながら、専門書の乏しいことまことに憐れむべき状態で、『侯馬盟書』は北京大学中に只一冊あるだけにすぎない。このほか古文字整理作業に必要な機械設備もひどく時代遅れで、多くの古文字研究者は整理作業に大量の時間を空費させられ、本を書いたりする時間を得られない。

(三) 古文字学の専門雑誌が無く、外国の関係学界の動向を知ることができない。目下国内には古文字に関する専門雑誌が一種類もない。他方近年外国で中国の古文字研究が急速に進展しており、中國古文字研究に熱心な学者がますますふえてきて、かれらは種々の方法で中国古文字資料を集め、種々の論文や專著を発表しているのに、われわれはこの種の出版物を輸入するのがひどく少く、この方面の情況をつかむことができない。

更に会議に出席した古文字研究者は、数年来新たに出土した大量の古文字資料が、その大部分をまだ整理できていない点を批判した。○甘肅省居延出土の西漢竹簡<sup>(マダ)</sup>は二万本もあるが、放置されて整理する人がいない。

○陝西省周原発見の西周甲骨文は極めて重要であるのに整理工作はまだ始まっていない。

○安徽省阜陽出土の西漢初年竹簡は五・六点の書物を含み、中には『詩經』があつて大変貴重なのに、今まで高閣につかねられたままである。

○河北省定県出土の西漢晚期の竹簡もまだ整理されていない。

専門家たちは、これら新発掘の古文字資料は必ず急いで救い出さねば、何年もするといいたんでもこわれてしまうと懸念している。

そこで建議された諸項は

(一) すみやかに全国的古文字研究機構を設立し、統一的指導と統一的

計画を進めよ。特に現有の人員と資材を適当に集中して、重要な古文字資料の救出におもむくことが目下の急務である。

(二) 青年後継者を間に合うように緊急に養成せよ。本年数個所の大学と研究機関はすでに古文字の研究生（大学院生）を募集しているが、これだけでは足りない。長期展望に立つて今後は中学で古漢語の教育を強化し、条件を具えた大学専門学校では古文字専攻課程を増設し、この方面的専門人材を培養すべきである。

(三) 専家や教授たちに積極的に条件を作り出し、かれらを組織してすみやかに一連の参考書と概説を執筆させよ。このために外国から若干の古文字研究資料を輸入しなければならない。

(四) すみやかに一種の「古文字研究」専刊をこしらえ、専門家たちに論文を発表する場を提供し、それによつて学術交流を一層深めるよりどころとし、この学科の発展を推進させよ。

であった。

この記事ははじめ七九年一月二十四日付け「文匯報」に掲載されたものであるが、中国古文字學術研究會がこの大会で成立し、「古文字研究」が刊行され、更に高明編『古文字類編』の如き利用価値の高い参考書が八〇年には刊行をみ、定県竹簡の整理結果が「文物」一九八一—八期に出た所からすると、この建議が直ちに採用され全面的に実行に移されたことが明らかである。

最初の討論会には全国一五省・市の三六機関から参加者があり、

### 中国における簡牘研究の位相

計二六名から三三篇の論文と報告が提出された。会場ではまず前年七七年に河北省平山の戦国時代中山王墓から発掘された長文の銘をもつ銅器について集中討議がなされた。そこで報告された張政烺（歴史研究所）・趙誠（中華書局）・孫稚雛（中山大学）諸氏の見解は「古文字研究」第一輯に論文として掲出され、于豪亮氏（文物局古文献研究室）の論考は「考古学報」一九七九一期に出ている。この場で中山王鼎・中山王壺・胤嗣壺三器銘文の通読をめぐって各自の見解が提出され、その史料価値が多面的に明らかにされた。更に参会した多くの研究者も銘文の釈読や銘文に反映した史実をめぐって銘々の意見をたたかわせることを通じて、「集思広益」（考えを集め成果をあげ）「取長補短」（長をとり短を補い）、これら三篇の稀にみる長文銘の釈読に大きな進展がみられた。この三篇の銘文が古籍に断片的に記述された中山国の歴史に貴重な新史料を提供したばかりでなく、戦国の歴史や政治・哲学・文学等各方面の研究にすべて重要な意義を有することが皆に認められたのである。この中山王鼎や壺銘の拓本は中山王國文物展（一九八一年三月～五月東京国立博、五月～六月兵庫県立近代美術館、七月～八月名古屋市博物館）に陳列されたのでわれわれも親しく接する幸いを得た。

討論会場では、各地から参加した考古学者が近年発見された古文字新資料を紹介した。譚維四氏（湖北省博物館）は七八年湖北省隨縣曾侯墓の発掘成果とその墓から出土した大量の銅器銘文と竹簡を紹

介し、徐錫台氏（陝西省文物管理委員会）は七七年陝西省鳳雛の西周宮殿遺址窖穴で見つかったト甲の出土情況を紹介し、刻辞の内容を分類例挙し、郝本性氏（河南省博物館）は七一年河南省新鄭の鄭韓古城出土の戰国銅兵器銘文の整理と研究成果を紹介した。

これら重要な新資料の大量の写真・摹本・拓本が会場に公開展示され、来会者の絶大な興味をよびおこした。従来失伝の一種の古代文字かとみられていた数字を組合せる特殊符号に関し、鳳雛の西周ト甲刻辞中のそれを見た張政烺氏が会場で「古代筮法と文王の演周易」と題する短い即席報告を話し、これらが五・六・七・八四個の特定数字だけで構成される複合符号であり、老陰・少陰・老陽・少陽四個の爻で構成される「卦」に他ならず、しかもこれら西周ト甲刻辞中に見られる六爻で組成される「重卦」は文王が重卦を作ったという歴史伝説に実証を提供するものと論じた。ト甲上の刻卦は当時のトと筮の関係をうかがう重要な手がかりになるのである。この張氏の創見は参会者の一致した称讃を博したという。

これは一例にすぎず、十余年にわたる文革による空白期を克服し、新たに全国的規模の討論集会に結集した中国の研究者の感動は推察に難くない。この集会では右にあげた他、殷墟の甲骨文に関する論文・報告が九件、両周秦漢金文と諸他の古文字に関する研究が十件、その他古代の文法・音韻に関する報告一件、七八年逝去した郭沫若氏の壮年期における古文字研究を論じた曾憲通・陳煥湛両氏

の共同報告等が読み上げられ、その多くは「古文字研究」第一輯に掲載されている。

この討論集会は、翌七九年には広州の中山大学で、八〇年には成都の四川大学でおいおい内容を充実させながら年一回の定期大会として定着し、本年の第四回は太原で開催される。最初の長春の集会で選出された理事二二名、秘書グループ九名は現代中国の代表的古文字研究者と認められるのでその名を挙げておこう（簡体字筆画順）。

于省吾　　于豪亮　　○馬國權　　馬承沈　　○王世民  
史樹青　　朱德熙　　○李學勤　　陳邦懷　　張政烺  
○張　領　　羅福頤　　胡厚宣　　○趙　誠　　徐仲舒  
○姚孝遂　　○高　明　　容　庚　　唐　蘭　　商承祚  
○曾憲通　　○裘錫圭　　（○は秘書グループ）

吉林大学古文字研究室編の「古文字研究」第一輯は四川省の重慶新華印刷工場で一九七八年八月印刷され、B5版四六六頁、三一万六千字を含み、討論大会の紀事や大会報告論文二十数篇の外、最後に日本の島邦男氏の論文「禘祀」（『殷墟卜辞研究』第一篇第二章）の華訳と前川捷三氏のメンジース旧藏甲骨の新刊二書の紹介（甲骨学一、一九七六）の華訳及び肖楠氏の編になる「甲骨学論著目録」（一九四九—七九、国内・国外に分け夫々專著と論文を年次順に著録）を付している。一見して各篇の文字が異筆な点が印象的である。各人の原稿をそのままオフセット印刷に付している結果で、異体や特殊文字の多

い内容から活字印刷は甚だ困難であり、時間と費用を節約するためには必要な選択と思われる。高齢の于省吾氏の「壽縣蔡侯墓銅器銘文考釋」などは別人がガリ版に淨書しているが、大部分は執筆者本人の自筆とみられ、その美事な楷書に感心させられる。中国の考古・歴史関係の雑誌や各大学の学報はすべて横組であるに対し、「古文字研究」だけは縦組である。

古文字学会の対象は大別すると、文字学理論（古代語法・音韻等を含む）・甲骨学・金文学・春秋戰国秦漢文字の四分野となり、簡牘は最後のグループの一的部分を占めるにすぎない。「古文字研究」は第五輯（一九八一年一月）まで既に刊行され（<sup>1</sup>日本でも見られるが、その中で直接簡牘を扱ったものは馬國權氏の「戰國楚竹簡文字略說」と曾憲通氏の「楚月名初探」二篇にとどまり、第三回大会（成都）の報告でも簡牘にかかる論文は管仲珊氏の「睡虎地秦墓竹簡中的數詞和量詞」及び周世榮氏の「貨幣帛書竹簡璽印文字叢考」の二篇だけである。これを見ても明らかなように簡牘資料の古文字研究全体に占める位置は極く限られたものではあるが、しかし不可欠の一要素をなしている。さればこそ居延や阜陽・定県出土簡牘の早急な整理を自らの切実な問題として要請しているのである。楚や秦漢簡牘の整理・叢文・研究に、于豪亮・史樹青・李學勤・裘錫圭氏らは重要な貢献をなしつつあり、中国における簡牘資料の整理推進には古文字学会の強力なバックアップが必須といつてよい。

古文字学会はかように狭い意味の文字学に限られず、広く甲骨・金文学を包括し、「古文字研究」には「商代的俘虜」といった歴史上重要なテーマを論じたものもあり、古代学全体を含んでいると称して過言でない。古文字の考証に終始するのではなく、歴史・言語・文化全般を対象とし、多様な方法論をもつて古文字を生み出した古代社会の解明をめざしている。他方中国考古学会は別に存在するので、考古学との分業関係ははつきり意識されている。しかし七年四月西安で開催された考古学会の設立大会で最年長八三歳の于省吾氏が議長を勤め、そこで選出された名譽理事六名中王治秋氏以外の五名（容庚・于省吾・徐中舒・商承祚・陳邦懷）が皆古文字研究会の理事であり、なお考古学会理事六四名中には、史樹青・張頴・張政烺・羅福頤・胡厚宣等古文字研究会の有力メンバーが含まれ、両者の密接な提携が示されている。

以上中国の三四年來の古文字研究会の動態の一端を見てきたが、巨視的にみるとわが国の木簡学会と対比される性格が多分にある。まず両者が夫々の国の上古の文字資料を主対象とし、しかも年々新資料の発見相つぐ情況にあること。第二に出土文字資料の訛読・整理を重要な課題としていること。第三には考古学と密接な連繫を有することがあげられよう。木簡学会々場で日本古代史家の味わう種々の感銘は、中国の古文字研究者が古文字討論集会で受けた多様な刺激と本質的に相通するものがある。古文字研究者は郭沫若氏に典

型的にみられるように古代史家に他ならず、今世紀における古代史学の発展は甲骨・金文学すなわち廣義の古文字学に負う所絶大であった。もとより中国と日本の両者の相違は諸般にわたって頗る大きい。その一々を列挙するのは無意味であるが、主要な一二三に限つて一瞥を加えるなら、まず中国の文字文化が自生的なもので古文字は紀元前一千数百年から後二・三世紀ごろまでを対象とするに対し、日本の文字は大陸から伝来したもので現在木簡の対象年代は七と九世紀を主とする。すなわち両者の対象は年代的にも大きくずれており同列において比較することはできない。中国の簡牘の年代も現在実物の存するのは前五世紀以降で、後三・四世紀以降紙の時代に推移することは周知の通りで、日本木簡と併行する時代の簡牘はやや限られた性質のものとなる。第二の大きな違いは中国文字資料の量的質的豊富さに比し日本のそれが相対的に甚だ貧弱なことである。この落差は一々細説をまたぬほど自明な現象であり、いわば文明中心と周辺地域の差のあらわれである。但し日本では資料が乏しいだけに零細なものまで見逃さず、微視的に丹念な作業が積重ねられ精緻な整理研究方法を生み出している点は、その先進性を示すものであつて、木簡が古代史研究に付与している活気と貢献の大きさでは中国に劣らぬ側面のあることを看過し得ない。又考古学と提携する点では両者共通するが、日本の方がその関係が格段に深まつていて木簡研究における考古学の比重が大きいに比し、中国は文字資

料が豊富で相対的に独自の研究領域が広いだけに、考古学との分業に有機的連繋の未熟さを免れていない。中国の現在の研究条件が物的な面で日本と比較にならぬきびしいものであることはいうまでもなく、豊富な資料を適確に処理し研究をレヴェルアップするに想像を絶する苦労の存することは充分諒解され、それだけに社会主義体制のもつ計画性を活かし豊かな人的資源を動員することによってその困難を克服し、飛躍的発展の準備を着々進めつつある中国研究者たちの英雄的努力に対しても、心からの敬意を覚えるものである。

ちなみに日本で中国の古文字学会に直接対応するのは日本甲骨学会である。金文学や古代史全般を同学会は対象に含めており、すでに三〇年の歴史を有し「甲骨学」一二冊を刊行し、学界に確固たる地歩を占めている。戦後京都で居延漢簡の研究が本格的に開始された時には、そのメンバーは多く甲骨学会の会員であり文字学的関心が強かつたと藤枝晃先生は述べられた。但し漢簡研究班はむしろ意識的に文字学へ傾斜することを抑制し、専ら古文書学的乃至歴史学的アプローチを目指したという。楚簡や秦簡の出現は古文字学との連繋を必然的に強めつつあり、今日では日本の中国簡牘研究にも古文字学の色彩が増す傾向を認め得る。

### 三 最近の研究状況一班

「木簡研究」創刊号（一九七九）には大庭脩「中国木簡研究の現状」が掲げられ、又同じく大庭脩「中国出土木簡研究文献目録」（関西大学文学論集二八一四、一九七九年三月、五一—八六頁）も出ていて、七八年頃までの状況は殆ど洩れなくそこに紹介されている。従ってここでは大体一九七九年以降今日に至る中国における簡牘研究の成果を、出版物を通じて一瞥するとともに、日本等における中国簡牘研究の論考についても管見の範囲で目録に加えようと思う。ただ筆者は簡牘を特に研究したことなく、その内容についても明るくないのでは、それらの成果を適確に要約することができず、甚だ不備の多い蕪雜なものとなることを怖れるが、本研究大会の場がにならう情報提供の役割的重要性を考える時、たとえ不充分なものでも無きにまさると思い紹介を試みることを許されたい。

まず近年の発掘として敦煌漢簡がある。これは一九七九年甘肃省博物館と敦煌県文化館が共同して敦煌県小方盤城の西一一糸の馬圈湾の漢代烽燧遺址で考古発掘を行ない、一二〇〇余枚の漢簡を得たもので、漢代玉門関故址の探索や漢代敦煌の研究に重要な資料を提供した。八〇年九月、秋山光和先生を団長とする敦煌文物研究専家訪華団の一員として蘭州の甘肅省博物館を参観した時には、新出の四簡が展示されており、中に「新始建國地皇上戊三年正月戊子朔」の年紀をもつものが含まれていた。河西四郡の西端に当る敦煌は漢の西辺最前線であり敦煌郡城北方の旧長城線につらなる遺址から

## 中国における簡牘研究の位相

は、今世紀初オーレル・スタイン探險隊の手で漢簡約千点が発掘され、シャヴァンスや王国維の研究を経て漢簡の最初のまとまつた資料として世に知られている。今回の発見はスタイン隊将来の簡に匹敵する漢簡を齎し、その性格は大体共通していて、年代も前漢後期・新・後漢初を主とするようである。従つて今後敦煌漢簡は旧出・新出両羣を一括して整理研究が進められることとなる。

次に一九七一年甘肃省甘谷県の漢墓から出土した甘谷漢簡について一言しよう。これは未だ正式の報告を見ぬようで、甘肃省博物館に展示されていたので始めてその存在を知つたものである。解説によると、内容の連貫したこの廿三枚の簡は、後漢桓帝の延熹年間（一五八～六六）後漢宗室の特權を擁護するよう重ねて命令を下した官文書であり、文中当時各地の宗室の土地が兼併に遭い財産も侵奪をこうむつていてその政治的地位が日に日に衰微してゆく実例が列挙され、後漢後期の中央集権の削弱と豪族割拠勢力の増強という歴史事実を生き生きとうつし出しているという。「延熹元年四月庚午朔十三日壬午」の年紀をもつ両行簡とそれに続く一簡（両行）が展示されていた。

甘肃省博物館は漢簡の陳列では世界一といつてよく、居延簡や武威簡の豊富な展示は參觀者を驚かせる。一九五九年発掘された武威の儀礼簡や七二年発掘された武威医藥簡などがガラス管に挿入された姿で展示されるに対し、居延簡や敦煌簡はじかにケース内に置かれていた。

甘肃省博物館では、同博の薛英群氏のお話では、ガラス管に封入したものは解説研究に不便が多いが保存のためその処置をとつたもので、現在までの所文字の鮮明度などは落ちていない由である。乾燥地帯で発掘された居延簡等は自然状態で残存したので安定していく扱いやすいという。展示は内容の興味深いものを標本的に掲出するやり方で、居延漢簡では、「勞邊使者過界中費冊」や居延右尉の封泥をはじめ、候望簡（爰書・行塞・驗問・伍長・曆長・烽火・伝馬・兵書・過所・吏卒・騎士・天田・任免・刈茭・転射・鄣卒・郵伝・閥伝・刑罰・購賞・候長・屯戍簡（戍卒・札函・製壘・農嗇夫・領物・名籍・農事・食匈奴・責絮・大奴・申禁令・倉稟・病死・市易・田卒・紀年簡・器具・治渠卒）の二類に別ち、各項ごとに一簡乃至四・五簡を並べてある。見出しの付け方は爰書・過所の如き実体そのものを示す例は少く、簡文にあらわれる名辭や内容にかかる事項を主とする。専門家対象の形式・内容による学問的分類によらず、漢代辺戌の諸相をヴィヴィッドに示す興味本位の陳列は、省博のもつ広い社会教育機関としての役割を考えれば無理のないものとみられる。一九七四年甘肃省博物館考古隊が、エチナ旗の漢代城塞肩水金闕と甲渠候官治所及び第四烽隣で試験的発掘を行なつて発見した二万点近い漢簡は、その一部が「考古」「文物」誌などに発表されたにすぎず大部分は整理中で簡文も知られていない。そうした整理中の資料が博物館に展示されている点は日本では考えにくうことだが中国の現実である。甘肃省博はか

りでなく、酒泉の博物館でも居延簡が五〇本ほどケースに展示されていた。なお甘肅省博では漢簡の複製（儀礼簡・王杖十簡など）を売店で販売しており、その木は漢墓出土の古材を使用している由であった。それを土産に買うのは主に外国人観光客（殊に日本人）という。筆者の求めた錦帙入りの王杖十簡は一九五元であったから、一箇当たり二〇元弱（三〇〇〇円弱）となる。古簡を髣髴させるこれらの複製は教育資料として有益なものとみられる。

居延簡の整理作業は甘肅省博と北京の国家文物局古文献研究室の両方で進められている。古文献研究室は帛書・簡牘・紙文書等の文字資料の整理出版を担当しており、主として写真によって作業を行なう。傷みやすいそして膨大な量の原品は大体現地の博物館に保管され、特別展覧等を機に北京や他の場所に運ばれることもあるのが一般情況で、特別な必要があれば撮影・調査等の為可能な範囲で北京に齎されるばあいもある。国家文物局古文献研究室には専任のスタッフは少く、多く他機関所属の専家が兼任の形で作業に参加する。例えば八一年一月に第一冊の出た『吐魯番出土文書』のばあいは、武漢大学教授の唐長孺氏が主任となり、古文献研究室と新疆維吾爾自治区博物館と武漢大歴史系魏晋南北朝隋唐史研究室の三者が協力合作して整理編纂を進めている。七五年末に湖北省雲夢睡虎地で出土した秦簡の整理は、古文献研究室が出来る前であつたが、于豪亮・安作璋・劉海年・朱思中・李學勤・陳抗生・張政烺・高恒・

唐贊功・曾憲通・舒之梅・裘錫圭・竇愛麗諸氏の参加するグループがこれに当つた。居延簡の整理となると、古文献研究室と甘肅省博及び社会科学院考古研究所の三者の協力が必要となり、錄文の刊行までには相当の時間を要しよう。殊に最近の中国は出版物が急増した為印刷に非常に時間がかかり、編集を終えてから刊行までに年余を費すのが普通となつた。われわれは資料集の出版が研究進展の基盤となることから、簡牘錄文の刊行といった地味な仕事に對しても当局者の理解が深まりその印行が促進されることを願つてやまない。

さて七九年から二年間あまりの簡牘研究を通覽すると、秦律に関するものが最もにぎやかで、ついで居延簡をめぐるものが多くの関心をひきつけている。簡牘にかかわる論著はかなり増加する傾向を示し管見の範囲でも百数十点に達する。次に一覧に便利なように、概觀・動向、秦簡、居延簡、その他に分つて右の文中に触れたものも含め簡単な目録を表示し参考に供する（一九七八年末刊の若干を加えた）。

#### 概觀・動向

大庭脩『木簡』（学生社、一九七九、B6、二四三頁）

紹介、永田英正（史学雑誌八九一、一九八〇）

大庭脩「中國簡牘研究の現状」（木簡研究一、一九七九）

大庭脩「中國出土簡牘研究文獻目録」（関西大学文学論集二八一四、一九七九）

Michael LOEWE 「中国新出土の木簡と帛書」（講演要旨、佐藤宗諱整理）（木簡研究一、一七七九）

邢義田「对近代漢簡著錄方式的回顧和期望附錄漢簡研究文献目錄」（史学評論二、一九八〇）

馬先醒「簡牘叢義」（簡牘學報七、一九八〇）

馬先醒「簡牘時代」（簡牘學報七、一九八〇）

馬先醒「簡牘踪跡」（簡牘學報七、一九八〇）

馬先醒「簡牘初現朝野傾動」（簡牘學報七、一九八〇）

馬先醒「歐州學人与漢晉簡牘」（簡牘學報七、一九八〇）

馬先醒「簡牘本之經史子集」（簡牘學報七、一九八〇）

馬先醒「簡牘質材」（簡牘學報七、一九八〇）

馬先醒「筆削与汗青」（簡牘學報七、一九八〇）

馬先醒「簡牘形制」（簡牘學報七、一九八〇）

馬先醒「簡牘文書之版式与標点符号」（簡牘學報七、一九八〇）

馬先醒「篇卷与竹帛」（簡牘學報七、一九八〇）

馬先醒「簡牘之编写次第与編捲典藏」（簡牘學報七、一九八〇）

馬先醒「簡牘形制研究」（國際漢學會議歷史与考古組報告、一九八〇）

王聿府「『簡牘檢署考』校注」（（簡牘學報七、一九八〇））

徐元邦・曹延尊「竹木簡」（歷史教學一九八〇一一）

初聞「漫談簡牘」（文物天地一九八一四）

## 中国における簡牘研究の位相

### 睡虎地秦墓竹簡

睡虎地秦墓竹簡整理小組『睡虎地秦墓竹簡』（文物出版社、一九七八年一月、B六、三二一頁）

高敏『雲夢秦簡初探』（河南人民出版社、一九七九、二四七頁）

古賀登『漢長安城と阡陌・縣鄉亭里制度』（雄山閣、一九八〇、六四一頁）

書評 山田勝芳（史学雑誌九〇一一、一九八一）

中谷英雄（東洋史研究三九一四、一九八一）

尾形勇『中國古代の「家」と國家』（岩波書店、一九七九、三四三頁）

書評 五井直弘（東洋史研究三九一六、一九八〇<sup>(2)</sup>）

黃盛璋『雲夢秦漢辨正』（考古學報一九七九一一）

黃展岳『雲夢秦律簡論』（考古學報一九八〇一一）

黃展岳「關於秦漢人的食糧計量問題」（考古與文物一九八〇一四）

高敏『論秦律中的『嗇夫』一官』（社會科學戰線一九七九一一）

高敏『有秩』非『嗇夫』弁一說雲夢秦簡札記兼與鄭秉同志商榷』（文物一九七九一三）

高恒「嗇夫弁正一談雲夢秦簡札記」（法學研究一九八〇一三）

錢劍夫「秦漢嗇夫考」（歷史研究一九八〇一一）

于豪亮「雲夢秦簡所見職官述略」（文史八、一九八〇）

李裕民「从雲夢秦簡看秦代的奴隸制」（中國考古學會第一次年會論文集一九七九、一九八〇）

大会報告、一九八〇、求索一九八一—二)

林 剑鳴「“隸臣妾”弁」(中国史研究一九八〇—一)  
林 剑鳴「秦國封建社會各階級分析—說《睡虎地秦墓竹簡》札記」(西  
北大學學報一九八〇—一)

劉 海年「從雲夢秦簡看秦律的階級本質」(學術研究一九七九—一)  
劉 海年「從雲夢出土的竹簡看秦代的法律制度」(學習與探索一九八  
〇—一)

崔 春華「戰國時期秦封建法制的發展—說《睡虎地秦墓竹簡》札記」  
(遼寧大學學報一九八〇—五)

于 豪亮「秦律叢考」(文物集刊二、一九八〇)  
張 銘新「關於秦律中的“居”—《睡虎地秦墓竹簡》注釋質疑」(考古  
一九八一—一)

商 慶夫「睡虎地秦簡《編年記》的作者及其思想傾向」(文史哲一九  
八〇—四)

韓 連琪「睡虎地秦簡《編年記》考証」(中華文史論叢一九八一—一)  
熊 克「“吏誰從軍”解—說秦簡《編年記》札記」(中國史研究一九  
九一—三)

謝 魏「范睢疑年考」(中華文史論叢一九八一—一)  
熊 鐵基「《叔向南郡守騰文書》—說《雲夢秦簡札記》」(中國史研究一九七  
九—三)

晁 福林「“南郡備警”說質疑」(江漢論壇一九八〇—六)  
曾 仲珊「《睡虎地秦墓竹簡》中的數詞和量詞」(第三回古文字研究

雲夢縣文物工作組「湖北雲夢睡虎地秦漢墓發掘簡報」(考古一九八  
一—一)

黃 盛璋「雲夢秦墓兩封家信中有關歷史地理問題」(文物一九八〇—  
八)

宋 敏「雲夢秦簡—奴隸制社會的新証」(東北師大學報一九八〇—四)  
劉 海年「睡虎地秦簡中有關農業經濟法規的探討」(中國古史論集、  
一九八二)

高 恒「秦律中的徭·戍問題—說雲夢秦簡札記」(考古一九八〇—六)  
張 政烺「秦律“葆子”“积義”」(文史九、一九八〇)

陳 抗生「“睡簡”雜弁」(中國歷史文獻研究集刊一、一九八〇)

邢 義田「雲夢秦簡簡介—附，對“為吏之道”及墓主喜職務性質的憶測」  
(食貨月刊九—四、一九七九)

林 錦生訖「大庭脩《雲夢出土竹簡秦律之研究》」(簡牘學報七、一九  
八〇)

詹泓隆·詹益熙訖「A. F. P. Hulsewé 《一九七五年湖北發現之秦文  
物》」(簡牘學報七、一九八〇)

馬 先醒「舉世笑談《睡虎地秦墓竹簡》—大庭脩·胡四維《博士竹書秦  
律論文書後》」(簡牘學報七、一九八〇)

高 明士「雲夢秦簡與秦漢史研究—以日本的研究成果為中心」(食貨月  
刊一—三、一九八二)

中国における簡牘研究の位相

- 李 成珪「秦の土地制度と庶民支配—雲夢出土秦簡と商鞅変法と再検討」（全海宗博士華甲紀念史学論叢、一九七九）
- 金 塉「雲夢出土秦簡と秦・漢初の徵兵適齡」（全海宗博士華甲紀念史学論叢、一九七九）
- 永田英正「中国における雲夢秦簡研究の現状」（木簡研究二、一九八〇）
- 秦簡講読会「〈雲夢睡虎地秦墓竹簡〉訳註初稿(二)秦律十八種・効律・秦律雜抄」（中央大大学院論究一一一、一九七九）
- 秦簡講読会「〈雲夢睡虎地秦墓竹簡〉訳註初稿(三)南郡守騰文書(語書)・為吏之道」（中央大大学院論究一二一、一九八〇）
- 秦簡講読会「〈雲夢睡虎地秦墓竹簡〉訳註初稿(四)法律答問(上)」（中央大大学院論究一二一、一九八一）
- 古賀 登「雲夢睡虎地某喜墓の秦律等法律文書副葬事情をめぐって」（史観一〇〇、一九七九）
- 松崎つね子「睡虎地十一号秦墓竹簡(編年記)よりみた墓主「喜」について」（東洋学報六一一三・四、一九八〇）
- 佐竹靖彦「秦国の家族と商鞅の分異令」（史林六三一、一九八〇）
- 好並隆司「商鞅「分異の法」と秦朝権力」（歴史学研究四九四、一九八一）
- 町田三郎「雲夢秦簡(編年記)について」（九州中国学会報二二、一九八〇、B四、図版二九三頁）下冊叢文未見
- 七九)
- 飯島和俊「“文無害”考—睡虎地秦墓竹簡を手がかりとして見た秦・漢期の官吏登用法」（中央大アジア史研究三、一九七九）
- 若江賢三「秦漢時代の労役刑—ことに隸臣妾の刑期について」（東洋史論一、一九八〇）
- 若江賢三「秦漢時代の「完」刑について—漢書刑法志解説への一試論」（愛媛大学法文論集文学科編一三、一九八〇）
- 池田雄一「湖北雲夢睡虎地秦墓管見」（中央大文学部紀要史学科二六、一九八一）
- 太田幸男「湖北睡虎地出土秦律の倉律をめぐって(1)」（東京学芸大学紀要社会科学三一・三三、一九八〇）
- 太田幸男「商鞅変法の再検討・補正」（歴史学研究四八三、一九八〇）
- 工藤元男「秦の内史—主として睡虎地秦墓竹簡による」（史学雑誌九〇一三、一九八一）
- 江村治樹「雲夢睡虎地出土秦律の性格をめぐって」（東洋史研究四〇一、一九八一）
- 居延漢簡
- 中国社会科学院考古研究所編『居延漢簡 甲乙編』上冊（中華書局、一九八〇、B四、図版二九三頁）下冊叢文未見
- 陳 夢家『漢簡緒述』（中華書局、一九八〇、B五、三一七頁）

陳直『漢書新証』(第二版、天津人民出版社、一九七九、A五、四九

許倬雲「跋居延出土的寇恩爰書」(陶希聖先生八秩榮慶論文集、一九七九)

甘肅省居延考古隊簡冊整理小組「“塞上烽火品約”釁文」(考古一九

七九—四)

薛英群「居延“塞上烽火品約”冊」(考古一九七九—四)

徐萃芳「居延·敦煌發現的“塞上烽火品約”——兼談漢代的烽火制度

一」(考古一九七九—五)

傅振倫「東漢建武塞上烽火品約考証」(考古與文物一九八〇—二)

甘肅居延漢簡整理小組「居延漢簡“候史広徳坐罪行罰檄”」(文物一

九七九—一)

徐元邦·曹延尊「居延出土的“候史広徳坐不循行部”檄」(考古一九

七九—二)

徐元邦·曹延尊「居延新出土的甘露二年“詔所逐驗”簡考証」(考古

与文物一九八〇—三)

初仕賓「居延簡冊“甘露二年丞相御史律令”考述」(考古一九八〇

—二)

伍德煦「居延出土“甘露二年丞相御史律令”簡牘考証」(甘肅師大

學報一九八〇—一)

裘錫圭「新發現的居延漢的幾個問題」(中國史研究一九七九—四)

薛英群「新獲居延簡所見寶融」(社會科學一、一九七九)

陳仲安「關於“栗君責寇恩簡”的一處釁文」(文史七、一九七九)

許倬雲「跋居延出土的寇恩爰書」(陶希聖先生八秩榮慶論文集、一九七九)

大庭脩「居延所出“候栗君所責寇恩事”簡書—爰書考補」(東洋史研究四〇—一、一九八一)

管東貴「從漢簡看漢代邊塞的俸祿制」(陶希聖先生八秩榮慶論文集、一九七九)

陳邦懷「居延漢簡考略」(中華文史論叢一九八〇—一)

余堯「甘肅漢簡概述」(甘肅師大學報一九八一—二)

傅振倫「西漢始元七年出入六寸符券」(文史一〇、一九八〇)

永田英正「居延漢簡の集成(3)」(東方學報五一、一九七九)

永田英正「新居延漢簡中の若干の冊書について」(富山大學人文学部

紀要三、一九八〇)

永田英正「簡牘よりみたる漢代邊郡の統治制度」(講座敦煌三、一九八〇)

吳昌廉「居延漢簡“標號”与出土地點關係探微」(簡牘學報六、一

九七八)

吳昌廉「居延漢簡所見之“簿”“籍”述略」(簡牘學報七、一九八〇)

吳昌廉「居延漢簡所見郡國縣邑鄉里統屬表」(簡牘學報七、一九八〇)

吳昌廉「居延漢簡繫年考略稿」(簡牘學報八、一九七九)

張壽仁「居延漢簡中昌邑王國簡之斷代」(簡牘學報六、一九七八)

張壽仁「居延漢簡·敦煌漢簡中所見之病例与藥方藥值」(簡牘學報

中国における簡牘研究の位相

六、一九七八)

張 壽仁「簡牘文字之芸術觀」(簡牘學報六、一九七八)

張 壽仁「漢代米与粟及大石与小石之換算与秦數用六關係之推測」  
(簡牘學報七、一九八〇)

張 壽仁「居延漢簡補編」志疑」(簡牘學報七、一九八〇)

馬 先醒「居延漢簡補編」(簡牘學報六、一九七八)

馬 先醒「關於第一四八・一〇号「居延漢簡」」(簡牘學報六、一九七  
八)

啓 衆「簡牘堂隨筆—漢邊郡武職之級數及其職稱」(簡牘學報六、一九  
七八)

林 振東「居延漢簡」吏卒籍貫地名索引」(簡牘學報六、一九七八)

劉 欣「居延漢簡補編」勘正」(簡牘學報七、一九八〇)

劉 欣「說史隨筆四則—居延漢簡中之糧倉」(簡牘學報七、一九八〇)

耿 豫玲「由居延漢簡看大男大女使男使女未使男未使女小男小女的  
問題」(簡牘學報七、一九八〇)

蔡 慧瑛「眾居延漢簡之「署」」(簡牘學報七、一九八〇)

何 智霖「符伝述略」(簡牘學報七、一九八〇)

陳 鴻琦訳「永田英正「試論居延漢簡中的「候官」—以破城子出土的  
「詣官」簿為中心」」(簡牘學報七、一九八〇)

陳 鴻琦「尚志齋隨筆—永田氏「試論居延漢簡中的候官」志疑・居延漢簡  
中的郵書・略論中國上古的「芻」」(簡牘學報七、一九八〇)

鄭 志民訳「勞榦「早期中國符契的使用」」(簡牘學報七、一九八  
〇)

吳 昌廉「恢復居延漢簡之旧觀—居延漢簡復原工作報告序」(簡牘學報  
七、一九八〇)

邱玉蟾・干寶猜「居延漢簡標號一六二号之整理及有關問題淺探」  
(簡牘學報七、一九八〇)

何家英・夏自華・賴惠蘭「瓦因托尼出土之漢代食簿(一)(二)(三)」(簡牘學  
報七、一九八〇)

謝 素珍「大灣出土之漢代「奉用錢簿」」(簡牘學報七、一九八〇)

羅 玉珍「地灣出土之漢武帝詔書」(簡牘學報七、一九八〇)

藤枝 晃「紫渡る赤い郵袋」(東西交流の実り四)」(大阪読売新聞一九七  
九年六月八日夕刊)

その他

中文系古文字研究室楚簡整理小組「戰國楚竹簡概述」(中山大學學報  
一九七八—四)

陳 煉湛「戰國以前竹簡蠡測」(中山大學學報一九八〇—四)

馬 國權「戰國楚簡文字略說」(古文字研究三、一九八〇)

隨縣擂鼓墩一号墓考古發掘隊「湖北隨縣曾侯乙墓發掘簡報」(文物  
一九七九—七)

裘 錫圭「談々隨縣曾侯乙墓的文字資料」(隨縣曾侯乙墓 發掘簡報  
與論文匯編)一九七九、文物一九七九—七)

曾憲通「江陵昭固墓若干問題的探討」（中山大學學報一九七七—二）

一九八〇）

曾憲通「楚月名初探—兼談昭固墓竹簡的年代問題」（中山大學學報一九八〇—（初稿）、古文字研究五、一九八一）

平勢隆郎「『楚曆』小考」（中山大學學報一九八一—一）

河北省文物研究所「河北定縣40号漢墓發掘簡報」（文物一九八一—八）

國家文物局古文献研究室・河北省博物館・河北省文物研究所定縣漢

墓竹簡整理組「定縣40号漢墓出土竹簡簡介」（文物一九八一—八）

同右「《儒家者言》《說文》（文物一九八一—八）

何直剛「《儒家者言》略說」（文物一九八一—八）

王東明・馮景初・羅揚「從定縣漢墓竹簡看西漢隸書」（文物一九八

一一八）

張震澤「《孫臏兵法》《禽龐涓》校理」（歷史學二、一九七九）

李零「關於銀雀山簡本《孫子》研究的商榷—《孫子》著作時代和作者的重議」（文史七、一九七九）

張烈「關於《尉繚子》的著錄和成書」（文史八、一九八〇）

馬雍「《孫臏兵法》《禽龐涓》解」（文史九、一九八〇）

唐蘭（遺著）「長沙馬王堆漢轪侯妻辛追墓出土隨葬遣策考析」（文史一〇、一九八〇）

朱德熙・裘錫圭「馬王堆一号漢墓遣策考析補正」（文史一〇、一九八〇）

朱德熙・裘錫圭「戰國時代的“料”和秦漢時代的“半”」（文史八、

周世榮「貨幣帛書竹簡壓印文字叢考」（第三回古文字研究大會報告、一九八〇）

胡繼高「銀雀山和馬王堆出土竹簡脫水試驗報告—兼論醇—醚連浸法原理」（文物一九七九—四）

田中 有「漢代遣策考—新出土資料を中心として」（加賀博士退官記念中國文史哲學論文集、一九七九）

杉本憲司「漢墓出土の文書について—特に湖北江陵鳳凰山漢墓について」（檍原考古學研究所論集五、一九七九）

山田勝芳「鳳凰山十號墓文書と漢初の商業」（東北大教養部紀要三三、一九八二）

江村治樹「戰國・秦漢簡牘文字の変遷」（東方學報五三、一九八一）

森村謙一「新出土医藥資料における自然品目の探求」（東方學報五三、一九八一）

村上嘉実「漢墓新発見の医書と抱朴子」（東方學報五三、一九八一）

朱國炤「上孫家寨木簡初探」（文物一九八一—一）

浦野俊則「秦・漢初の簡牘帛書の書体と隸書の成立」（二松學舎大學論集昭和五四、一九八〇）

以上その他、文物編輯委員會『文物考古工作三十年』（文物出版社、一九七九）の甘肅（一四六頁）、山東（一九三頁）、湖北（三〇一—三頁）、湖南（三一四—五頁）等には各省の簡牘出土とその整理研究について

有益な概観がみられる。又七九年度からは『中国歴史年鑑（一九七九年）』（生活・読書・新知三聯書店、一九八〇）という極めて便利な年鑑（年間の研究動向・学界便覧・新刊書目等を一冊にまとめたもの）が作られるようになり、史学界の状況を容易に一覧し得るようになつた。本年鑑の余白にのつたニュースには前述した敦煌出土漢簡が見えている。

簡牘の書籍の研究は帛書と深い関係をもつが、紙幅に限られここでは一切省略する。それでも右に列挙された諸成果を通じてみるとその量的盛況は空前と称して過言でない。七八年春夏に発掘された湖北省隨県擂鼓墩一号墓（曾侯乙墓）出土の楚簡は二四〇余枚、約六〇〇字を算し、内容は喪儀に用いられた車馬兵甲の記載であるが、前四三三年を上限とする戦国前期の資料として量的質的に出土戦国簡の代表といえるものである。又七三年河北省定県中山王墓出土の前漢後期簡は『論語』や『儒家者言』を含み、思想史の上でも興味ある資料であり、他方七八八年七月青海省大通縣上孫家寨西漢末期墓出土の木簡軍令・兵書類は、法制・軍事史の見逃せぬ史料である。かように年々簡牘出土の地域が拡がり、その内容も多様性を増して来ていることは、簡牘研究の洋々たる未来を確信せしめるものである。戦国と後漢にわたる簡牘資料の充実は、その間の書体の推移と地方差に大きな見通しを与える江村氏の労作の如きを生み出しており、春秋末の玉石に朱墨書された盟書以降の筆写文字の

字体・書風の変遷がかなりたどられるようになった。

しかし夥しい論考の簇出の前提には、睡虎地秦簡のように大部分の写真と録文が刊行され、更にすぐれた現代語訳・簡注・簡略索引の具わる普及簡装本の流布という条件のあることに注意せねばならない。七五年末に発掘された睡虎地秦簡は、法家路線をP.R.する政治的背景と偶合した為尤も急速に整理刊行が強行され、七六年の「文物」に釈文が連載され、七七年に図版・釈文の豪華本を出版、七八年末に訳・注付きの普及本が出たのである。<sup>(3)</sup>五九年に武威で発掘された儀礼簡等の正式報告『武威漢簡』が六四年に公刊され、七二年五月長沙馬王堆で発掘された一号漢墓の報告書が翌七三年十月に出た例などと比べると、写真図版と釈文を揃えて刊行するには一年半（二年は最低かかるとみられ、写真と模本・釈文の三者を並べ、優れた解説・研究をまとめて刊行された『武威漢簡』のような報告書には五年を要しても不思議はない。七八年一月、国家文物事業管理局に古文献研究室が設けられてからは、簡牘の釈読印刷にここが責任をもつ体制が整い、発掘考古学者と保管に当る現地博物館及び古文献研究室三者の聯携が漸次スムーズに運営されるようになつたので、今後は専家の養成と共に一層スピードアップすることが期待される。

右掲著書論文中最も重要な出版物は、いうまでもなく『居延漢簡甲乙編』と『漢簡綴述』である。前者は一九五九年刊『居延漢簡甲

編』とその後編纂された同乙編の両本を合体し、若干の補訂を施して新刊されるもので、上冊の図版が八〇年七月に中華書局から刊行され、下冊釈文・附録も近刊予定ときくが未だ現物に接しない。この上下が揃えば、一九三一年に西北科学考古団により採集された約一万点の居延漢簡の最も信拠し得るテキストとなることが期待される。上冊の編輯説明（七七年七月）によると、乙編の編輯途中で全居延簡出土地点清冊を得たのでそれを利用して排列に大幅の手直しを行い六五年に定稿を成したが、文革の為出版が十年以上延引した。その間七二〇七四年の考古調査で、漢代張掖郡管下の居延・肩水兩都尉下の各種文書二万点近くの出土を得、旧出簡と併せ統一的科学的整理が必要とされるに至り、既刊甲編と合して旧出全簡の写真と毎簡出土地点を付した新校定釈文を『居延漢簡甲乙編』として印行することとなつたのである。図版の甲編部分一八九頁は初版と殆ど同じであるが、第一七四頁の七点は実はロブノール簡の誤入したものである点が指摘され（但し図版は存置）、その他若干の細部のとりかえがなされ重印された。旧版と見較べるとやや黑白のコントラストが強くなつた傾向があり、原版は同じでも見え方に差があるので、併せ観ることも無駄ではない。乙編二九三頁は原簡の番号順に排列され、最後に失号・無号をおき、なお甲編の鮮明を欠く四一簡の重製写真と前河北博物院蔵簡（寧夏二里河・甘肅毛目県北上湾出土）と商承祚藏写真（前西北図書館蔵簡、後台北中央図書館蔵）を付載する。

五七年勞幹氏により刊行された『居延漢簡図版之部』より収載簡数を増し、鮮明度もやや優るばかりが多く、排列も合理的なので、今後は本書が旧出居延簡の基準テキストとなるであろう。なお編輯説明によると、釈文は甲乙編を通じて原簡番号順に排列し、写真にもとづき、賀昌群氏の「釈文稿本」一五冊・馬衡氏の「釈文稿冊」三冊・同「釈文義」四八七七頁を参考して作成される。但だ若干簡は漫漶甚しく或いはひどく潦草で釈読困難であり、且つ現在原簡と照合することができぬので釈文を確定しがたいという。甲編刊行から既に廿余年を経、新出簡も著しく加わり漢簡研究の水準も相当進歩した今日、新たに校定釈文が提供されることは真に時に適った貢献であり、印刷の一日も早い完了を切望する。なお釈文の後に出土地点と編号の説明・ソンマーストロム氏等の考古報告中の関係資料の編訳を付録し、附表として出土地点と簡番号の相互対照表、賀・馬兩氏釈文稿及び簽の表、釈文未收簡（不明瞭・残欠・不可釈・無文字）表、木製品・木槧等雑品表が添えられる由である。

なお旧出居延原簡の大部分は、大戦中アメリカで保管され、一九六七年台湾省に還され、現在台北の国立中央研究院歴史語言研究所の考古組の保険ケースに厳重保管されており、一部が同所李濟記念館に展示されている。伝えられる所では台北保管の居延簡は発掘簡全体からいうとかなり減少しているが、先年勞幹氏が実査した所では保存状態は良好という。現在歴史語言研究所の管東貴氏が原簡に

ついて釈文の校訂作業を続けられている由で、その結果の公表が待たれる。

将来においては台北と蘭州にある両群の居延簡は一括して整理されるべきもので、その為には『居延漢簡甲乙編』と管氏の旧出原簡による既刊釈文校定の両者が、大小の差はあれ共に土台となる筈である。

『漢簡綴述』は陳夢家氏の漢簡研究論考一五篇を集録したもので、六三〇六五年に「考古学報」等に発表された六篇と、生前未刊の九篇（「漢簡所見太守・都尉二府属吏」「西漢都尉考」「關於大小石・斛」「漢代烽燧制度」「河西四郡的設置年代」「漢武辺塞考略」「漢居延考」「西漢施行詔書目録」「武威漢簡補述」、全書の約四割を占める）を陳公柔・徐萃芳氏が整理して一冊にまとめられた。六〇年六月から七月にかけ蘭州に出張し武威簡の整理に携った陳氏は、研究の興味を甲骨金文より漢簡に移し六二年より六六年九月逝去に至るまで居延簡の研究に没頭し十四篇の論文を執筆し、主要な五篇は相ついで発表され、残りの九篇も併せて『漢簡綴述』一書にまとめることは陳氏の意志であった

という。その出版が遷延したのはやはり文革の為であり、今日大量の新出居延簡を加え漢簡研究の發展期に際しその手堅い論考が利用しやすくなつたことは有難い。例えば「西漢施行詔書目録」で取上げられた長簡は勞榦氏の図版には含まれぬもので、大庭氏『木簡』一三〇一頁に若干の言及はあるが、この陳氏の論文で一層詳細な

解明が施され、前漢の法制史に貴重な貢献を齎した。『武威漢簡』と本書を并せみる時、当時までに出た労榦氏や日本の研究文献の成果に負う所も相当あるとはいえ、わずか数年間でこれだけの偉業を達成した陳氏の努力に何人も歎賞を惜しまぬであろう。いわば文革の被害者として早世された著者に対し、漢簡研究者は深い哀悼を捧げざるを得ない。

新出居延簡は量的に旧出簡の二倍に達するだけでなく、数十点の冊書を含み出土状況も一層はつきりしている点からその価値は遙かに旧出簡をしのぐものがある。大戰や文革の障害に遇い旧出簡の整理釈文は半世紀を経てやっと一応の段階に達するという艱難の歴史を歩んだが、今日の漢簡研究の蓄積の上に立てば新出簡の整理は數年で釈文公刊にこぎつけることも不可能ではないであろう。中で興味深い資料「塞上烽火品約」や「候粟君所責憲恩事爰書」等については既に数篇の研究が出ており、漢代史の制度的日常生活的側面の理解はこれら豊富な簡牘資料の丹念な分析総合を通じ今後画期的に深められるに違いない。

なお文献リストに頻出する「簡牘学報」は台北の陽明山にある中國文化学院内に活動中心をおく簡牘学会（七六年以前は簡牘社）の機関誌で、労榦氏の受業門弟馬先醒氏によって運営されている。近年は海外論文の翻訳を掲載する等視野を拡げつつある点は認められるが、掲載文には習作に類するものが多く篇数の多い割には学界に貢

献する所乏しい。しかしその精力的活動は適當な指導助言を得れば将来遙かに有効なものとなることが期待される。

#### 四 中國における紙の時代の簡牘

中國の文字資料・文献を巨視的に時代区分すると、簡牘・帛書時代、紙写本時代、印刷書時代に三分され、第三世紀が簡牘から紙へ、第十世紀が写本から印刷への夫々過渡期をなしている。金石文は右の三時代を通じ併存するが、商代の甲骨、两周の金文、後漢・南北朝・隋唐の石刻といったように時期により異なる主役がある。甲骨・金文の時代（前五六世紀以前）の簡牘帛書は今の所実物の伝存乃至発掘はないが、それらが存在して一定の機能を果していたことは、古伝承や典や冊の字形が簡をつらねた象形である点からみて疑いない。従って漢代に新しい書写材料として紙が現れ二世紀にその改良により実用化が進み、三世紀には簡牘と併用されるようになり四世紀以降書写の主役となつたことは、千数百年の簡牘帛書時代と訣別する革命的变化であった。中國簡牘の主体がこの変化以前即ち魏晉以前に属することはいうまでもないが、四世紀以降も現代に至るまで種々の竹や木の材が書写に使われる例が一部に見られる。日本の木簡が中世近世にも使用されている現象とそれは対比され、両者の本質的共通性が認められるであろう。

中國の紙の時代の簡牘については、日本木簡研究者によつても一応の見通しが示されており、東野治之『正倉院文書と木簡の研究』には、晋令の木札製戸籍、晋南北朝の木札告身、唐の木契や考選の際の甲、明の簡板等文献に現れるものと、敦煌発見の羊籍・納青麦曆等の木簡や新疆出土のカロシユテイ文・チベット文木簡、清初の満文木牌に至るまで要約紹介されている。

以下近年発見の諸例も含めその二三を紹介して参考に供する。簡牘の使用される最も重々しいケースは伝統的な儀礼を引継いだもので、六世紀北齊では「後齊正日、侍中宣詔慰勞州郡国使。詔牘長一尺三寸、広一尺、雌黃塗飾、上写詔書三。計会日、……又班五条詔書於諸州郡国使人、写以詔牘一枚、長二尺五寸、広一尺三寸、亦以雌黃塗飾、上写詔書。」（隋書・卷九礼儀四）と伝えられ、慰勞詔が一×一・三尺の牘、五条詔が一・三×二・五尺の牘に記されていたことを知る。他方五代後晋開運二年（九四五）使者を遣わして高麗王を冊封した時の竹冊の詳細が『高麗史』卷二惠宗世家に見えている。「勅賜高麗国王竹冊法物等、竹冊一副八十簡、紫絲絛聯、紅錦裝背。冊匣一具、黑漆銀舍陵金銅鑑鑰二副。攀環紅錦托裏襯冊文。兩幅黃綾夾帕一条、蓋冊匣。三幅黃綾夾帕一条、蓋冊匣。三幅黃綾油夾帕一条、拳冊匣。熟紫絲板二条、絡冊床。熟紫絲油画檻床一張。銀裏脚角竿頭、金栱木冊案一面。紫綾案褥一領、夾裙襪。全行事、紫綾席褥一副。襯冊床、紫綾席褥一副。」八十簡を紫絲でつら

ね紅錦で装背した冊書が用いられた訳であるが、トルコ系沙陀部の後裔の建てた後晋は争乱中十年程の命脈しかなかったにもかかわらず、右の如き贊を凝らした冊書を作つており、その伝統の根強さを窺うに足る。

叙任関係では、七二年に吐魯番盆地アスター一七七墓から発掘された王族且渠封戴に敦煌太守を追贈する木表がある。これは一四・二×一・四×〇・八種の木板に左の七行の墨書を記したもので、

有

令。故冠軍將軍・都郎中・高昌太守封戴、夫功高德邵、好爵亦崇。惟君誕秀神境、文照武烈。協輔余躬、熙繼絕之美。允釐庶績、隆一變之祚。方遵旧式、褒賞勲庸。策命未加、庵然先逝。眷言惟之、有恨乎心。今遣使者陰休、贈君敦煌太守。魂而有靈、受茲嘉寵。

承平十三年四月廿一日起、尙書吏部<sup>(4)</sup>

五世紀中葉（四五五）匈奴系の北涼余裔政権で使用された例である。王令による追贈を尙書吏部を通じて発給したもので、遺族がそのまま墓中に埋納したとみられる。因みに同墓からは石の墓表（四三・八×一四・二種）も出土しており、墓主且渠封戴が承平二三年四月廿四日埋葬されたことが確認される。

墳墓文書としては買地券及び衣物疏の類に牘を使用したものがあ

る。宋末の周密は『癸辛雜識別集』に「今人造墓、必用買地券、以梓木為之、朱書、云々」と述べるが、出土した実例では唐末と南唐の三券（唐「大順元年」（八九〇）庚戌九月洪州南昌縣熊氏十七娘買地木券<sup>(5)</sup>、七三年江西省南昌市北郊唐墓出土、四二×三七×三種<sup>(5)</sup>・南唐昇元二年（九三八）陳氏買地木券、五六六年江蘇省揚州市西郊出土<sup>(6)</sup>・南唐保大一年（九五三）六月廬州合肥縣姜氏為亡妹買墓木券、五七年安徽省合肥市城東南鄉七五秆肥河農業社出土<sup>(7)</sup>）がある。買地券は後漢に始まり漢魏時代は簡形の鉛券が多く甄券これに次いだが、六朝以後は甄石が主流となり木や紙も使われ近時に及んだ<sup>(8)</sup>。又楚・漢の遣策・贈方は墳墓簡牘の代表として周知されているが、六朝以降は衣物券或いは衣物疏の主流は紙になつた。吐魯番盆地の墓からは数十点の衣物疏の出土を見るが、十六国時代から唐代に至るまで殆どすべて紙に記され<sup>(9)</sup>、木牘は僅かに升平八年（三六四）六月の一点が知られるにとどまる。吐魯番以外では紙文書が墓中に残る例が殆ど無いので紙の衣物疏は見付かつておらず、木牘が少例あるにすぎない。その代表的なものは晋年次未詳（四世紀）南昌吳應隨葬衣物木方（七四年江西省南昌市東湖区永外正街晉墓出土、二六・二×一五・一×一・二種、墨書<sup>(10)</sup>）と北齊武平四年（五七三）七月青州齊郡益都縣高僑妻江妃隨葬衣物券（清末山東省臨朐県出土、端方旧藏、九・五×四・九×〇・七五寸、墨書<sup>(11)</sup>）である。前者は三段に品目を列挙し、最後に大字で「右冊七種」と記され、品目中に「故書箱一枚」故書硯一枚」故筆一枚」<sup>(12)</sup>「册一百枚」故墨一丸」故刺

「五枚」が見え、既に紙の時代の筆記具が明示されながら、衣物疏は木方（牘）を用いる点が注意をひく。同墓からは「弟子具應再拌問起居 南昌字子遠」「中郎豫章南昌都鄉吉陽里吳應年七十三字子遠」の如き木簡（二五・三×三×〇・六牘）五枚が出土し、衣物疏の「故刺五枚」と対応する。これをみれば紙の時代になつても伝統的な贈方や刺は簡牘が襲用されていたことを目のあたり認めるのである。

衣物疏には晉升平五年（三六一）六月荊州長沙郡臨湘縣公國典衛令周芳命妻潘氏隨葬衣物券<sup>〔13〕</sup>のように滑石に刻された例もあり、同時代に木牘・紙・石の併用を知るが、金石では現在右の一例が報告されているにすぎず、大体からいえば、死者の衣類装身具以下の副葬品を列举した文書は戦国と魏晋時代は簡牘を用い晋十六国以降は主に紙を使用したとみられる。

次に石や甄が一般に使われる墓志にも木板の例がある。吐魯番盆地で発掘された高昌延昌八年（五六八）十月張武僕妻翟氏墓表<sup>〔14〕</sup>は、延昌八年戊子歲十月朔 王寅十六日丁巳北府 左右張武僕妻 翟氏之墓表

墳墓以外の調査で注目すべき発見は、一九七四年福建省泉州湾で沈没船から引上げられた木牌三三點・木簽六三點がある。<sup>〔15〕</sup>計一三艘の外洋貿易船の船艤から大量の香料木や薬物等に混つて見付かったもので、「河郡」（〇・七×三・一×三・一牘、細腰部一・三牘）「吳興」（〇・六×一・一×二・四（細腰部一・八）牘）等地名、「西河醬瓜」（〇・六×八・六×六・七牘）の商品名、「朱庫國記」（〇・六×一三×一・三（細腰部一・三）牘）「南家記号」（〇・六×一〇×一・八（細腰部二）牘）等人名・商号を記した荷札の類とみられる。形は方形・六角形・菱形束腰形等種々あるが、繩でくくつて貨物に付けられたもので、伴出宋錢類から宋代の木牌・木簽と認められる。

以上を通して、日本の宮都址出土木簡と直接対比すべきものは殆どないが、広い視野で簡牘をみるにはいずれも見逃せぬ資料といえよう。

最後に内陸アジアの乾燥地帯で発見された漢文以外の諸外国文を記した簡牘について一言しよう。これらに関しては従来特に木質書写材として深く研究されたもののみず、相互の比較検討もなされていない。しかし新疆維吾爾自治区の地域すなわち東トルキスタンや甘肃等では漢文簡牘と併行する年代に遡るものもあり、中国簡牘を考える際一応視野に含めておくのが適當であろう。そこで東洋文庫奨励研究生の森安孝夫氏から得た教示を中心と簡単に一瞥を加える。外文簡牘で年代の古いものは、カロシュティー文とソグド文

で、殊にカロ・シュ・ティー文木牘は数百点に上り、蓋をかぶせ封泥を施した例もあり、三世紀クロライナ王国の行政・司法官文書以下種々の内容を含んでいる。<sup>(16)</sup> 主な出土地はニヤ・ローラン遺址で、スティン探検隊将来品はロンドンの旧インド省図書館に保管されている。ソグド文の古代木簡もスタイン隊の発見にかかり、敦煌北方の漢代長城線遺址で発掘され<sup>(17)</sup>、時代は不確定だが三四世紀とみると妨げないようである。なお時代の降る七世紀のソグド文木棒文書が、

中央アジアタジキスタンのムク山から廿三点ソ聯調査隊により発掘された<sup>(18)</sup>。これは柳枝の樹皮をはいで作られた棒状のもので長一三〇  
厘×径六厘から長一〇厘まで大きさは区々である。

次にインド系のラフミー文字で書かれ、新疆の古代住民で伊朗系の者になったものに、サンスクリット木簡とクチャ語木牘がある。前者はスタイン将来<sup>(19)</sup>、後者はベリオの将来にかかり、六点の隊商用バスポート（長八一六、幅四一〇厘）とみられ、時代は七世紀とされている<sup>(20)</sup>。

八世紀後半～九世紀前半に属し数の多いのはチベット文木牘で、主にスタイン隊によりコータンに近いマザール・ターキーとミーラン等の城砦址で発掘された<sup>(21)</sup>。大体長一〇一五厘、幅一二一五厘の木簡で、一方が尖ったものもあり、多数の右端（稀に左端）にひもを通すための小穴があり、それにより綴じて保存されたことがわかる。内容は名札や武器リスト・物品リスト、人名と穀物数量を記入

した支給簿や人名と耕地面積を記した田地乃至公課文書や書簡、軍事の命令や報告、任官辞令、請願や決裁、契など多様にわたっており、紙と併用されていた。

その他一〇世紀のウイグル文棒状文書がプロイセン隊により吐魯番から発見され（二点ウイグル文、一点漢文、ウイグル文の完形は長八四厘、径二〇・五厘で一端が尖る<sup>(22)</sup>）、内容は造塔等の功德で仏に幸を願つた祝文を内容とする。

これら三～一〇世紀の内陸アジアの木牘は形式も多様であり、内容も多岐に涉るが、全体としてインド・イラン文明圏と深い関係を有しており、言語・文字だけでなく、筆記用具や書写型式（よこがき）も西方系に属し、作製者はイラン系・インド系・トルコ系等多種であるがいずれも文化複合として漢族のそれとは基本的に異質である。但だ人的交流や混血は両者間に存し、時期によれば漢族の政治的軍事的支配下におかれた時もあり、漢人の木牘と形式等の面で交流が全く考えられぬ訳ではない。

なお大谷探検隊将来のラフミー文字木牘やウイグル文木棒断片が東京国立博物館東洋館に所蔵されているが、未だ研究は出ていない。

(1) 「古文字研究」の内容は、

二輯（八一年一月）一六二頁。唐蘭氏追悼特輯。中華書局編輯部編。

三輯（八〇年一月）一二八十六九頁。大会に関係ない一四篇収録。

同右

四輯（八〇年一月）一一六一頁。第一回年会の一三篇収録。中山大學

古文字研究室編。

五輯（八一年一月）三一〇頁。第一回年会の一九篇収録。同右

(2) 尾形氏の著は対象の広い研究で、一部に秦律・敦煌居延漢簡を利用している。こうした論著は挙げれば際限がなくなり中国古代史の研究文献の数分の一に及ぶであろう。ここには代表として本書を掲げるにとどめる。なお筆者の『中国古代籍帳研究』（東大出版会、一九七九）にも秦漢籍の参考資料として秦漢簡を用い、又諸種文書に漢簡廿一点の録文を加えた。

(3) 睡虎地秦簡整理グループのメムバー達は、刊行をせかされた為意に満たぬ点が多いと残念がつていられる由であるが、短時間でここまで整理された努力は賞讃に値するものと思われる。細部には簡の排列に確定しがたい点が残り、釈読にも異論の余地が無いとはいえながら、大きな枠組は動かず釈文も九九%は信頼できると称して過言でなかろう。なお社会科学院法學研究所中国法制史研究室等で睡虎地秦簡のより信拠し得る標準テキスト（図版と釈文を含む）編刊の計画があると聞く。

(4) 周偉州「試論吐魯番阿斯塔那且渠封戴墓出土文物」（考古与文物一九八〇—一）参照。図版は『新疆出土文物』（文物出版社、一九七五）所収のものが大きく鮮明。

(5) 江西省博物館（陳文華・許智范）「江西南昌唐墓」（考古一九七七—六）

(6) 朱江「四件没有發表過的地券」（文物一九六四—一）

石谷風・馬人權「合肥西郊南唐墓清理簡報」（文物參考資料一九五八

—111)

(8) 中国の買地券等墓券については筆者の「中國歷代墓券略考」（東洋文化研究所紀要八六、一九八一）に簡単な概観を試みたものを参照。

国家文物局古文献研究室・新疆維吾爾自治区博物館・武漢大学歴史系編『吐魯番出土文書』第一冊（文物出版社、一九八一）には十六国時代の墓から出た十二点の衣物疏を収録し、小田義久「吐魯番出土の隨葬衣物疏について」（龍谷大学論集四〇八、一九七六）には麌氏高昌時代の衣物疏六点と唐代の一点を錄すが皆紙である。

(10) Henri MASPERO; Les Documents chinois de la troisième expédition de Sir Aurel Stein en Asie Centrale. The Trustees of the British Museum, 1953, p. 262. 本文は磨滅しているが衣物疏の類と推測される。

(11) 江西省歴史博物館（劉林）「江西南昌市東吳高榮墓的發掘」（考古一九八〇—一）

(12) 端方等『飼齋藏石記』卷一三、「文物」一九六五一〇、八頁図八。

(13) 史樹青「周芳命妻潘氏衣物券考釈」（考古通訊一九五六—一）。原田淑人『增補漢六朝の服飾』（東洋文庫、一九六七）一八五—九〇頁。

(14) 新疆維吾爾自治区博物館「吐魯番阿斯塔那—哈拉和卓古墓群清理簡報」（文物一九七二—一）一四頁図一七。

泉州灣宋代海船發掘報告編寫組「泉州灣宋代海船發掘簡報」（文物一

九七五一—一〇）

(16) A. M. BOYER, E. J. RAPSON, E. SENART (ed.); Kharosthi Inscriptions discovered by Sir Aurel Stein in Chinese Turkestan. Part I~III, Oxford, 1920~29.

(17) Aurel STEIN; Serindia, vol IV Plates, 1921, Pl. CLVII. N. SIMS-WILLIAMS; The Sogdian fragments of the British Library, III X VIII-1, 2, 1976.

中国における簡牘研究の位相



簡に関し、近年の研究文獻で本文中の列挙に洩れた若干を左に補つておく。

附記

于豪亮·李均明  
「秦簡所反映的軍  
事刑罰考析」

高 恒

裘錫圭

「秦簡中与職官有關的幾個問題」  
「嗇夫初探」

「秦漢時期的亭」

「秦王朝關於少數民族的法律及其歷史作用」

「秦漢時期的亭」

于豪亮  
高 敏  
于豪亮  
李学勤  
李学勤  
張政烺  
于豪亮

「秦簡与《墨子》《城守各篇》」

「秦簡的古文字學考察」

「秦律《集人》《首義》」

「秦簡《日書》《記時記月諸問題》」

最後に雲夢秦簡に関する資料・論著目録（一九七六～八一年初）を付し、  
本稿の前掲目を補うものが相当含まれている。